

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2007～2010

課題番号：19251013

研究課題名（和文）先史アンデス社会における権力の生成過程の研究

研究課題名（英文）A Study of the Formation Processes of Power in the Prehistoric Andes

研究代表者

關 雄二 (SEKI YUJI)

国立民族学博物館・研究戦略センター・教授

研究者番号：50163093

研究代表者の専門分野：アンデス考古学・文化人類学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：(1)考古学、(2)文化人類学、(3)文明、(4)複合社会、(5)権力

1. 研究計画の概要

本研究の目的は、南米アンデス地帯に成立したアンデス文明のなかでも、形成期とよばれる文明初期（前 3000 年～紀元前後）に焦点をあて、新たな分析視点と分野横断的な手法を導入することにより、文明の成立過程を解明し、人類史の構築につなげることにある。

形成期は一般に国家形成以前の段階とされ、神殿建設とそこでの儀礼活動によって社会統合が図られた時期といわれる。本研究では、ペルー北高地に位置する大規模な神殿遺跡パコパンパの発掘調査を通して、権力の発生と、その変貌という新視点を先史社会の分析に導入する。この場合、権力を生み出す基盤として、経済、軍事、イデオロギーといった権力資源を想定し、リーダー（後の支配者）によるこれらの資源操作や、権力を行使される側の反応を考古学的に読み取る。

具体的には、発掘および周辺の一般調査を軸に、GIS（地理情報システム）を構築するための基礎データ蓄積作業を行い、次に出土遺物や遺構を対象に、権力資源解析を行い、最終的に理論構築へとつなげる計画である。

2. 研究の進捗状況

(1) 基礎データ抽出作業については、3 年間、延べ 2 回におよぶ神殿中核部の発掘を行い、データの集積に努めた。神殿の利用は二時期に大別され、放射性炭素年代測定法によって、I期が前 1200～前 800 年、II期が前 800～前 500 年頃にあたり、各時期は、複数の建築相に細分できる点も明らかになった。

地形測量図、出土遺構図、断面図のデジタル化は終了しており、ペルー国土地理院より入手した遺跡付近の数値地図を基に、各図

面をリンクさせ、これに出土遺物に関するデータ（遺物のリスト、写真、図面など）をリンクさせる準備が完了している。これにより基本的な GIS の完成は目前である。

一方で、一般調査のデータの集積については、いまだ不十分な状態にある。

(2) 基礎データの抽出作業と並行して行ってきた権力資源の解析も順調に進んでいる。2-1. 経済面に関しては、自然科学者の貢献が大きい。たとえばデンプン粒分析により I期では熱帯性根菜類の利用が認められ、これが II期に消失する代わりに、トウモロコシが導入されたことが判明した。この結果は、出土人骨のコラーゲン解析による食性復元結果とも一致しており、I期から II期にかけての生態環境利用の変貌が伺われる。また形質人類学解析によれば、II期以降の虫歯の増加が確認されており、食生活の変化も示唆される。トウモロコシは、アンデスでは、食糧としてだけでなく、酒にして儀礼で使用されることが古くから知られているので、この結果はイデオロギーに結びつく可能性もある。

また、II期より銅製品が大量に出土し、また付近には銅鉱山が存在することから、銅の入手と製作が権力形成と関係した可能性が浮上してきた。

2-2. 権力基盤の一つである軍事に関しては、少なくとも襲撃などによる集団的な戦争の証拠は認められていない。

2-3. イデオロギー面で特筆すべきは、建造物の配置に、ある軸が基準とされている点である。しかもこの中心軸の延長線上は、隣接する他の遺跡の中心を通り、遠方の山の頂、さらには、アンデス地域において農耕の開始時期を告げることで有名な星団スバルの出

現場を示すことが明らかになった。権力者のイデオロギーが景観と結びつけられた点が伺われる。

もう一点、2009年度の調査で、遺跡中核部の建物の中より、金製品を含む副葬品を納めたⅡ期の墓が発見された点が重要である（報道等の資料は、〔その他〕を参照）。墓は、上記の中心軸が通る場所にあたり、Ⅱ期の建築活動の開始時に重要人物が埋葬されたと解釈できる。形質人類学者の暫定的レポートによれば、性別は女性で身長は、男性平均より高く、また頭蓋変形の痕跡が認められるという。副葬品には、遠く海岸地帯からもたらされた貝を用いた装飾品が含まれるなど、長距離交易の存在が伺われる。Ⅰ期にはこの種の墓がないことから、Ⅱ期における権力者の出現を考える上では最大の収穫と言える。

（3）理論構築については、いまだ途上ではあるが、とくに2-3でとりあげた墓の発見が多く示唆を与えてくれる。すなわち、本研究の代表者を含む日本人研究者は、従来、協同労働による神殿の建設と更新が、生業などのインフラへ刺激を与え、社会発展を引き起こしたとする「神殿更新説」を唱えてきた。本研究によれば、この説はⅠ期には該当するものの、Ⅱ期では、明確な「神殿更新」の証拠がないことがわかった。にもかかわらず、Ⅱ期に権力者が出現していることは、別の解釈の必要性を示唆するものである。この意味で、上述の経済基盤の変貌を告げる証拠は、重要な鍵を握っていると言える。併せて、本年度本格的に取り組む被葬者の形質人類学的分析や副葬品の解析により、権力発生過程の新たな知見が得られることは間違いない。

3. 現在までの達成度

①当初の計画以上に進展している。
（理由）

2. で示したように、当初予定していた基礎データの蓄積は順当に進んでいる。またデータの解析についても、文理融合がうまく機能し、その成果も各種学会で発表され、さらに研究代表者が迅速にそれらを取りまとめた上で、内外の国際集会、ならびに論文、一般書などで発表している。こうした点を鑑みれば、達成度は予想以上に早く、また成果も着実に出していると自信を持って言える。

4. 今後の研究の推進方策

基礎データで言うならば2点ほど課題が残る。1点はずでに指摘したように、一般調査が遅れており、これがデータに反映されていない点である。これについては、これまでペルー人を含む外国人調査団が集積したもので補うことを考えている。すでに刊行されたデータであるので利用は問題ない。

もう1点は、基礎データが権力者側に限定

され、権力を行使された側の情報が乏しい点である。この点を補うため、2010年度には神殿域外の住居址の発掘を行い、これにより神殿のデータとの比較を行う予定である。

最後に、理論構築に欠かせない墓の分析を早急に進めることをあげておきたい。権力発生新たなモデルの構築に向け、権力基盤の解明を自然科学者とともに進めていきたい。これについては、他の財団（平和中島財団）の援助が得られることが確定しており、2010年度には総力を挙げて取り組む予定である。

5. 代表的な研究成果

〔雑誌論文〕（計23件）

① Tomohito Nagaoka, Yuji Seki, Juan Pablo Villanueva, Walter Tosso Morales, Kinya Inokuchi, Mauro Ordóñez Livia, Diana Alemán Paredes, Daniel Morales Chocano, “Human skeletal remains from the Pacopampa site in the northern highlands of Peru.”, *Anthropological Science*, 117(3), pp. 137-146, 査読有, 2009.

② 関雄二、「古代アンデス社会におけるエリート誕生と工芸品生産」、『國學院雑誌』、109巻11号、pp. 165-183、査読無、2008。

③ Masato Sakai, Juan Pablo Villanueva, Yuji Seki, Walter Tosso y Araceli Espinoza, ‘Organización del paisaje en el Centro Ceremonial Formativo de Pacopampa’, *Arqueología y Sociedad*, 18, pp. 57-68, 査読有, 2008.

④ 鶴澤和宏、「先史アンデスにおけるラクダ科家畜の拡散」、『生態資源と象徴化』弘文堂、pp. 99-130、査読無、2007。

〔学会発表〕（計42件）

① Yuji Seki y Juan Pablo Villanueva, “Cambio del poder en la sociedad del Periodo Formativo: desde el punto de vista de la sierra norte del Perú”, 53^o Congreso Internacional de Americanistas, Ciudad de México, 2009. 7. 20.

〔図書〕（計4件）

① 大貫良夫・加藤泰建・関雄二編『古代アンデス 神殿から始まる文明』朝日新聞出版、296頁、査読無、2010。

〔その他〕

① 国立民族学博物館ホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/research/sr/19251013.html>

② 墓の発見についての主な報道

El Comercio 紙 2009/9/15 ; LaRepública 紙 2009/10/4 ; 読売新聞朝刊 2009/9/21 ; 朝日新聞夕刊 2009/9/21 ; 産経新聞大阪版朝刊 2009/10/25 ; 毎日新聞大阪版朝刊 2009/12/17 ;

NHK ニュース 2009/10/22